

Ⅲ 総括

【学部教育】

平成 18 年度に薬学 6 年制教育が開始され、信頼される薬剤師、良質な薬学研究者を遅滞無く養成することが薬学教育の現場に強く求められている。本学薬学部は平成 16 年に設置されたことから、薬学教育モデル・コアカリキュラムに沿ったカリキュラム構築を行うことができ、今年度は 6 年制教育の要といえる OSCE(Objective Structured Clinical Examination)や CBT(Computer Based Testing)を含む実務実習事前学習への対応も良好であった。また、本学は仏教主義を建学の精神に据えた大学であり、生命の尊さの認識や医療における倫理の重要性を学ぶ科目設定は、総合大学の強みを活かした本学独自のものと自負する。

本学薬学部はこれまでに 4 年制学生を 2 度世に送り出している。卒業生の進路を見るに、製薬企業と治験関連企業への就職率は、平成 19 年度は 31% (80 名中 25 名)、20 年度は 33% (55 名中 18 名)と、平成 19 年度私立薬科大学平均値(13%)と比較してかなり高い。これは本学独自の「香粧薬学系科目」と「製薬産業系科目」の充実に基づくものと考えられる。今後の 6 年制薬学教育にもこの特長を生かしたい。

【大学院教育と薬学研究所】

本学は平成 15 年 4 月、薬学部設置 1 年前に薬学研究所を設置し、日々新たな「知」が付け加わる薬学を学生に教える教員は、その「知」の真贋を自ら見極めて取り入れるのでなければならず、そのためには教員自らが研究者となり、研究所で実験し新しい“知”を生産することにより、その真贋を見極める心技を磨くべきとの考えをもとに、薬学部教員が薬学研究所を併任するシステムを取っている。平成 16 年度から平成 20 年度に文部科学省の私立大学学術研究高度化推進事業の「ハイテク・リサーチ・センター整備事業」に選定され、「老年性疾患に関する分子基盤研究と治療法に関する研究」のテーマで、近年の高齢化社会と共に増加する老年性疾患の分子基盤研究と治療法に関する研究を推進した。成果は原著英文論文 121 報、学会報告 313 件で、また 3 回の公開シンポジウムを開催し公表すること

に努めた。

また、平成 21 年 4 月に 3 年制の大学院薬科学研究科薬科学専攻(博士後期課程)を開設した。「高度薬科学研究者養成コース」と「高度実務薬科学研究者養成コース」での教育・研究評価は今後のこととなるが、薬学研究所及び大学院薬科学研究科での教員の研究・教育姿勢や研究成果、及び配属研究室での「卒業研究」は学部学生の教育に多大な影響を与えている。平成 20 年度の 4 年制卒業生 92 名中 29 名(32%)もの学生が大学院修士課程に進学している。

以上、4 年制学生の就職、進学、新卒者の国家試験合格率(平成 19 年度 : 89.32%、平成 20 年度 : 92.39%)、及び今年度の 6 年制における入学志願倍率(18.9 倍)や薬学共用試験合格率(OSCE、CBT 共に 100%)等から鑑みるに、新設の薬学部として順調に推移していると判断する。薬学 6 年制の趣旨を良く理解し、本学薬学部の理念、目標、目的に沿った教育・研究の更なる充実に向けて、教職員一同自己改革を図っていく所存である。